

## 日本で開催された 第12回国際鳥類保護会議 (ICBP) への協力

鶴見みや古 (山階鳥類研究所自然誌研究室)

国際鳥類保護会議 (The International Committee for Bird Preservation, 1958年にThe International Council for Bird Preservationに改称, 略してICBP) は, 野生鳥類の保護を国際的に連携して行うことを目的に設立された組織である。第一回の国際会議は1922年(大正11年)にベルギーのルクセンブルグで開催されている。この第一回の会議に先立ってICBPから日本鳥学会に日本代表派遣の招請があり, 学会は鷹司信輔, 蜂須賀正氏両氏を派遣している。本会議は当初は4年ごとに開催されていたが, 第二次世界大戦後は協議することが多いことを理由に2年ごとの開催となり, 日本は第5回(1926年, オランダ), 第6回(1928年, スイス), 第7回(1930年, オランダ), 第8回(1934年, イギリス), 第10回(1954年, スイス), 第11回(1958年, フィンランド)の各会議に前述の二氏のほか黒田長禮, 山階芳麿, 黒田長久各氏ら日本鳥学会の重鎮を日本代表として派遣している。そして1960年(昭和35年), 第12回会議が日本で開催されることになり, 山階芳麿(日本鳥類保護連盟), 黒田長禮(日本鳥学会), 中西悟堂(日本野鳥の会)各氏を代表に, 日本鳥類保護連盟を主体として本会議が東京で開催された。当時の日本は経済不況で国際会議開催のための資金調達にはかなりの苦労があったようだ。本国際会議を開催するに当たり, 学会は会誌「鳥」のなかで, 会議への会員諸氏の物心両面の協力を仰いでいる。結果としては, 鳥類保護関係諸団体, 林野庁, 外務省, 国連, 民間からの募金, 財界から援助を得て会議は成功裏に終了した。日本代表の一人である山階芳麿は本会議の報告書のあとがきの中で, 「今回の国際鳥類保護会議は日本として全く初めての経験であったが, 前述の通り極めて盛大に, 何のとどこおりもなく行われたことは日本の鳥類関係の官民が一体となって努力した結果で

あって喜びに絶えない。」と記している(山階1960)。本会議では, 会議のほか, 鳥類の生態映画鑑賞, 保護区の見学, さらに軽井沢, 関西方面, 北海道方面への見学旅行も行われ, 関連資料には多くの日本鳥学会会員の名が記され, この国際的行事に大きく貢献したことがうかがえる。なお, ICBPは1993年に改組され, バードライフ・インターナショナル(Birdlife International)として今日に至っている。

会議会場: 東京都港区麻布鳥居坂2 国際文化会館  
期日: 1960年5月24日-28日

視察旅行: 1960年5月29日-6月15日

日程および場所: 5月29日(野田鷺山, 越ヶ谷銃  
獵禁止区域), 5月30・31日(軽井沢方面), 6  
月1日-5日(関西方面), 7日-15日(北海道  
方面)

(会議についての詳細は, 参考文献 VIII Bull.  
ICBP (1962), 黒田1960, 山階1962を参照され  
たい。)

### 参考文献

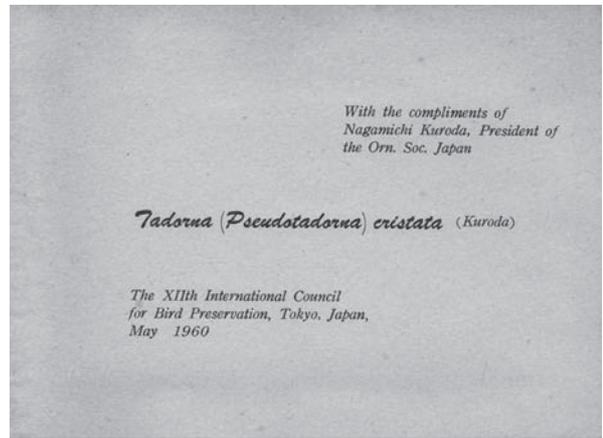
- Ripley, S. D. (1962) Introduction. VIII Bulletin of the International Council for Bird Preservation. 5-6.  
日本鳥学会庶務幹事(1958)雑報. 日本で国際鳥類保護委員会開催(予告). 鳥 15(71): 50.  
日本鳥類保護連盟(1959)国際会議関係(書類綴り).  
黒田長久(1959)国際鳥類保護会議(東京)の準備進捗. 鳥 15(74): 40.  
黒田長久(1960)第12回国際鳥類保護会議終了. 鳥 15(76): 52-309.  
松山資郎(1997)野鳥と共に80年. 文一総合出版, 東京.  
自然保護年鑑編集委員会編(1996)自然保護年鑑4. 日正社, 東京.  
山階芳麿(1962)第12回国際鳥類保護会議を終わって. 12pp. 日本鳥類保護連盟, 東京.



1



2



3



4

- 1) 閉会式に於ける記念撮影 (山階鳥類研究所蔵). 前列右端が黒田長禮会頭.
- 2) 会議の様子 (山階鳥類研究所蔵).
- 3) 黒田会頭が記念として贈呈したカンムリツクシガモ標本のマウントカラー写真 (110×69mm). 右はマウントの裏. (山階鳥類研究所蔵. 寄贈: 岡田泰明氏).
- 4) 第12回国際鳥類保護会議記念として郵政省から発行された切手「トキ」(山階鳥類研究所蔵. 寄贈: 友田安雄氏).